

サラ金会社の 上場廃止を望む

テレビのコマーシャルを見ていると、なぜかサラ金のコマーシャルばかりが目立つ。消費者信用産業といえば聞こえはよいが、所詮は街の高利貸し。サラ金会社は肥え太って、ばかばかしくも上場までしている。なぜ、街の高利貸しが上場までしてしまったのか。株主総会で一般株主を目の前にしてサラ金会社の社長が議長席に座り、営業報告を読みあげるときを想像すると、妙な感じを受ける。「今期は銀行の貸し渋りのおかげでわがサラ金会社の売り上げはうなぎ上り、かねてから利益率アップのため強化していた、不良債権撲滅運動に社員各位が奮闘努力し、厳しく取り立てを実施したおかげで、首つり自殺者が前年比20%増の350人に達しました。これは同業他社の約2倍に相当する成果であります。」などと発表する光景はとても上場会社としてほめたものではない。いや、上場会社にはそぐわない光景だ。

アメリカでは高利貸しのことをローン・シャークと呼ぶそうだ。シャーク

はサメ、ジョーズよろしく人間にガブリとかみつき食い散らすのがその名の由来だ、という。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉があるがサラ金というサメはただどん欲なだけである。上場会社としての見識を身につけるわけでもなく、スケールアップした体でより多くの消費者を餌食にしようとたくらみ、コマーシャルを垂れ流す。こういう反社会的な企業は本来上場会社などにはしてはいけないはずである。日陰に咲くあだ花としてヒソソとした存在に戻すべきなのだ。サラ金会社の上場廃止を望みたい。

